# プログラム・ノート

ベルリンフィルは、カラヤンが1967年にザルツブルク音楽祭を創設するまでは、基本的にオペラ劇場で公演を行わないオーケストラでした。そして、少なくともその当時までは、そのようなオペラやバレーなどの劇場での音楽を日常的にやらないオーケストラは、一段低く見られていたようです。ヨーロッパでオーケストラ単独の演奏会を行う老舗のオーケストラの多くは、劇場のオーケストラを母体として発達した例が多いようです。最も有名なのが「ウィーン・フィル」。これは、ウィーン国立歌劇場管弦楽団の有志メンバーの自主的な活動として始まりました。最近では、2015年の5月にイギリスのロイヤルオペラの管弦楽団（それまでオーケストラピットでの演奏だけをしていた）が、ステージに上がりオーケストラ単独の演奏会を定期的に始め、ちょっとしたニュースになっていました。つまり、歌劇場付き楽団が基本で、単独の演奏会をするオーケストラはそこから派生したもの、という構図です。

事情は18世紀から19世紀にかけての作曲家にも言えるようで、オペラ・歌劇を書く（書ける）作曲家が最も高く評価されていたようです。しかし、なぜかベートーベンは歌劇は『フェデリオ』1つしかありません（ブラームスには歌劇はひとつもありません）。理由はいろいろと考えられそうですが、作曲家の中でも、得意分野に特化した専門化が起こり始めていたのかもしれません。そのような中で、劇の付随音楽として作曲されたのが『**エグモント序曲**』です。今で言えば、大河ドラマのテーマ音楽とでも考えていただければよいでしょうか。劇の内容は、圧政に反旗をひるがえし、死刑に処された男の英雄的行為をたたえるという、ベートーベン好みの内容です。短い中にも、圧政に苦しむ民衆、それに挑む英雄の戦いと苦悩、そして最後は勝利のマーチと、充実した内容の音楽になっています。

ブラームスといえば、偉大なベートーベンの後に交響曲を書くことに大変な苦労をしたことがよく知られています。交響曲第1番を書くのに、着想から20年以上の歳月をかけ、43歳になった1876年にようやく完成、ベートーベンの第九交響曲の初演からなんと52年も経っていました。ところが、最初の交響曲の生みの苦しみを乗り越えたせいか、翌1877年にはあっさりと交響曲第2番を完成させています。こちらは、重厚な印象の第1番と異なり、大変さわやかで軽やかなイメージの音楽となっています。興味深いことに、**ピアノ協奏曲**に関しては、逆に第1番の完成（1857年）から**第2番**の完成までなんと22年もの間が開いています。2つの交響曲を完成させ、バイオリン協奏曲も書き上げたあとのまさに脂の乗り切った時期の作品といえるようです。イタリア旅行の際にインスピレーションを得たとされ、ウィーンに戻ってバイオリン協奏曲を完成させた後、短期間で一気に書き上げたということです。

ピアノ協奏曲といえば、チャイコフスキーやラフマニノフ、あるいはグリークなどロマンティックで親しみやすい作品がまず思い浮かぶでしょうか。あるいは、ベートーベンやモーツァルトの作品も長く親しまれていますが、ブラームスのこの協奏曲は、玄人好みの完成度の高い充実した内容の作品といえるでしょう。演奏時間は長いですし、技術的にも難しい音楽です（Wikipediaによりますと、ピアノ奏者の間ではラフマニノフの第３番と並ぶ、「ピアノ協奏曲の難曲」であるということです）。

この曲の１つの大きな特徴は、４つの楽章からなるということす。ホルンの独奏で始まる優美で壮大な第１楽章はこの協奏曲全体の雰囲気を支配します。appassionato (激しく・情熱的に)という発想記号のついた第2楽章はスケルツォ風（早い３拍子）のスケールの大きな楽章で、あまたあるピアノ協奏曲の楽章の中で名曲中の名曲です（ブラームスは友人宛の手紙で、この楽章を「小さなスケルツォ」と呼ぶという茶目っ気を見せています）。優美なAndanteの第３楽章ではチェロの独奏に第１主題を演奏させているという特色があり、ピアノソロのチェロとの掛け合いが聞き所です。最後に、軽快な２拍子の第４楽章が続き、異なる性格の４つの楽章が、全体として見事な構造体をなしています。

当団とは3回目の共演となる植田克己氏が聞かせてくれる本格的なブラームスの響きを、ごゆっくりとお楽しみください。

（メディア・コミュニケーション研究院　奥　聡）